特集：座談会

稲岡章代
INAOKA FUMIYO
（兵庫県姫路市立豊富中学校）

柏木賀津子
KASHIWAGI KAZUKO
（奈良市教育委員会）

兼重 昇
KANESHIGE NOBORU
（鳴門教育大学）

畑田 文
HATADA AYA
（大阪府箕面市立西小学校）

竹内 理《司会》
TAKEUCHI OSAMU
（関西大学）

小中連携を考える

竹内　平成 23 年度から小学校に外国語活動が本格的に導入されます。また，市町村によっては平成 21 年度から前倒しでカリキュラムが実施されるところもあります。外国語活動を体験してきた子どもたちが入ってくるとき，中学校の英語教育はどのようになるのかということも考えつつ，スムーズに子どもたちが小学校から中学校へ移っていけるように，小中連携について話し合っていきたいというのがこの座談会の主旨です。

小学校では『英語ノート』が入り，電子黒板で授業ができるようになるなど取り組みは進んでいますが，この状況は中学校では意外と知られていません。本日の座談会でそのような情報も共有し，今後の中学校の英語教育のあり方についても考えていければ幸いです。

小学校外国語活動の現状と成果

竹内　では最初に，それぞれの地域の小学校外国語活動の現状と，『英語ノート』や ICT 教材などの利用形態を教えていただけたらと思います。

柏木　3 年前までは，奈良市全体としての小学校英語活動はあまりやってこなかったのですが，2010 年に世界歴史都市会議が奈良市で開催されることも視野に入れ，「子どもたちに日本のことを発信できるような英語力を」ということで，2 年前から「ハローイングリッシュ」が始まりました。外国人を含む，英語が堪能な地域の方に英語アシスタントとしてご協力いただいてスタートしたのですが，地域に密着した英語活動ということもあって，英語アシスタントの方が力を発揮されました。そして担任の先生も，「こんなに子どもが学ぶのならやってみよう」と一緒に授業をされるようになりました。英語アシスタントはインプットの授業が上手ですし，担任の先生はインタラクションのある授業が上手なので，役割を分担しながら進めていらっしゃいます。

この 2 年間で子どもたちが驚くほど力をつけた学校もありますが，模索中のところもありますので，教員研修や訪問研修を各学校で行っています。また，英語活動が進むにつれ，やはり小中の連携が必要だという声もありましたので，市で推進室を作り，小・中・高・大の教員に集まっていただき，連携の柱について話し合っています。『英語ノート』については，昨年以降，各学校で指導案を作ってもらったり，市教委で活用資料を作ったりしています。そこにも奈良らしさを入れ，「奈良らしい英語活動」ができるよう工夫しています。

ICT 教材は，英語アシスタントの英語に触れられるので，特に必要ないようなのですが，担任の先生が一人で授業をするときに活用したという声を聞いています。

竹内　地域人材の活用に取り組まれていること，担任の先生がうまく入りつつあることがわかりました。小中連携にも必然性が出てきているのですね。

柏木　中学校の先生も，子どもたちがどういう勉強をして入ってくるのかということに興味を持っていらっしゃるようです。

竹内　さて，次は箕面市立西小

学校の取り組みと，箕面市の状況を教えていただければと思います。

畑田　西小学校での英語活動は1999年から始まりました。私は2003年からJTEとして小学校に入り，担任とTTを行っています。

最初は，何から手をつければいいかわかりませんでしたが，英語学習というより，コミュニケーションや異文化理解に焦点を当てるという，国の方針を理解できてから，あいさつ，自己紹介などからカリキュラムを作っていきました。取り組むにつれ，中学校では十分に時間を割けなかった数字や建物，国名などをゲームで取り入れても，子どもたちがおもしろいほど吸収するのを目の当たりにすることができ，英語活動の可能性を感じることも多々ありました。

『英語ノート』は，自分で作成したカリキュラムに合わせて適宜使っています。ただ，『英語ノート』にのみ頼り切って児童の実態に応じた工夫をしなければ，コミュニケーションの楽しさを味わわせることができないのではと，個人的には少し懸念しています。

箕面市全体では，英語活動を3年生から実施しており，ALTも週に2回派遣されています。教員研修として，指導案を作成したりもしてきました。今年度は意見交流もでき，取り組みが形になりつつあります。ただ，全体のものになっていないのが課題です。

竹内　箕面市は異文化理解から英語活動につなげていったということですね。可能性は大いにあるが課題もあるということでしょうか。

奈良市の英語活動の場合は，英会話型でしょうか。異文化理解型でしょうか。

柏木　内容は異文化理解型ですが，奈良や外国のことを扱いながらも，コミュニケーションの力をつけることを目指しています。

竹内　「コミュニケーション能力の素地」の育成に力を入れられているわけですね。それでは，姫路市の状況はどうでしょうか。

稲岡　姫路市は外国語活動の準備段階のまっただ中で，最近小中一貫教育標準カリキュラムが出来上がりました。拠点校，研究会もありますが，市全体としての教員研修はそう多くは行われていません。私の知る範囲では，それぞれの学校や担任の先生によって取り組み方は違っているようです。しかし，「いろんなことを知りたい」と授業を見に来られる小学校の先生からは大いに意欲が感じられ，それが子どもたちにも伝わるのではと期待しています。

今後，市内の全小中学校において小中一貫教育が行われるようになっていきます。全教科での小中連携が必要であり，連携を軸とした教育改革が行われていくと思われます。

ALTは，小学校には希望により数週間に1回の割合で派遣されますが，小学校でどんなことをしたらよいかを，中学校の先生に尋ねたりしながら授業を行っている状況も見られます。地域人材を活用している小学校もあります。

竹内　今が入り口で，組織的にこれから取り組もうとされているのですね。取り組み状況も学校によって違うということでした。小中一貫教育になるというのは今の動きですね。英語教育にとっても追い風になるのではと思います。

さてそれでは，全国的な動きをうかがいたいと思います。

兼重　地域・行政区によって，また学校によってだいぶ取り組み方が違うのが現状です。

地方では，ALTが一緒に活動できる機会が多いのですが，都市部ではALTの人数が足りないので，ICT教材の活用が望まれています。

また，先ほど地域人材の話がありましたが，担任の先生やALTがうまく授業を進められるようにサポートする役割，バックアップするコミュニケーター的役割として，地域人材をとてもうまく活用している地域もあります。地域人材に望まれる資質とはどのようなものかということは，ポイントになると思います。

『英語ノート』については，カリキュラム自体は拠点校を参考に作られたという経緯があるのですが，拠点校ではこれまでの活動にどう『英語ノート』を合わせていくかと

PROFILE

稲岡章代

兵庫県姫路市立豊富中学校教諭。優れた授業実践によって2000年度パーマー賞を受賞。生徒の表現力を伸ばすための様々な工夫を積み重ねている。授業の様子は2003年11月NHK教育テレビ『わくわく授業』でも紹介された。2006年度兵庫県優秀教職員表彰を受賞。

INAOKA FUMIYO

KASHIWAGI KAZUKO

KANESHIGE NOBORU

HATADA AYA

TAKEUCHI OSAMU

いうことが課題となると思います。また，拠点校以外の学校はレファレンスとして使えるだろうというイメージを持っているようです。『英語ノート』以外のテキストを使っている学校もありますが，いずれにしてもどう地域と結びつけていくかがポイントになると思います。

全国的な傾向としては，ALT任せではなく，担任の先生が一生懸命取り組んでいることが，この1年の大きな変化かなと思います。

竹内　地域人材の活用法は，一緒に授業をする役割，サポーター的役割など様々ですね。全国的には担任の先生が中心となって進めてきている，というのが小学校の現状と理解いたしました。

さて，小学校の現状がわかったところで，中学校側から見た小学校外国語活動の成果や影響を教えていただきたいと思います。

稲岡　一番に，生徒が英語を使う割合が多くなってきたと思います。例えば，子どもたちに“Hello.”とあいさつすると，以前はにっこりするくらいでしたが，今は“Hello.”と返ってくるようになりました。また，英語を聞くときも「この人は何を言っているのかな」と，わくわくしながら想像することもでき始めているのではないかと思います。相手の目を見てちゃんと話をするなど「相手を意識する気持ち」が持てているのかなと思います。これは，ことばを使う上でとても大切なことです。

心配しなくても，子どもたちはちゃんと世界に目を向けて中学校に入ってきています。そのような「素地」を持って入ってくる子どもたちを，中学入学と同時に「書くこと」だけに焦点を当てた評価などで縛りすぎないことが，小中で連携をする上で重要になるのだと思います。

竹内　「コミュニケーション能力の素地」という点ではかなり改善が見られたというご感想ですが，教育委員会の立場で，いろいろな学校を見られていていかがですか。

柏木　5年目を迎える小中一貫校に行くと，9年生はALTと自然な会話ができるようになっていました。その子どもたちは，「外国の人に道を聞かれたら助けてあげる」と言うんです。それは相手を助けてあげられる自信があるということなんですね。英語をスポンジのように吸収し，文法などを楽しく学び，習ったものから使っていきたいという子どもたちの態度に先生方も驚いています。

竹内　外国人に話しかけられても「逃げない」という目標は達成されたわけですね。さらに自分から助けようという意欲まで出ている。

柏木　小中一貫校では文字の導入までに100時間以上，英語の音に触れています。あまり英語が得意でない子どもも，たくさんの“example”に触れてきているので，難しく感じるような文でも，自分がかつて聞いたり発したりした例に戻って考えるようで，語順を間違えることは少ないようです。

また，子どもたちはゲームが大好きですが，高学年ほど「やりとり」している中味の方にも興味を持っていることが，英語活動のアンケートでわかりました。友だちのこと，外国のことについての関心が高くなってきている，これを何とか中学校に伝えて引き継ぎたいと思います。

小学校外国語活動と中学校英語の違い

竹内　小学校の状況がわかってきたところで，そもそも小学校と中学校の英語では何が違うのかということを考えてみようかと思います。どんなところが大きく違うと思われるでしょうか。

兼重　小中の授業スタイルはもちろん違いますが，一番違うのは授業を作るときの根本的なイメージだと思います。小学校はトピックや場面がまず設定され，そのあとで表現がついてきますが，中学校は教科書があるので，表現にまず焦点が当たり，そこから授業を作っていく傾向があります。

語彙についても，『英語ノート』で何語扱っているかが話題になりましたが，そこからいくらでも広がってよいという，オープンエンドなイメージがあるのが小学校です。中学校でも新学習指導要領になると，広がりが出てくるだろうとは思うのですが，現状では範囲がある程度決まっています。そういったところが違うと思います。

竹内　小中両方で教えられた経験のある畑田先生はどうですか。

畑田　子どもたちの興味・関心に基づいて自由に組み立てたり，他教科や「総合的な学習の時間」と

オーバーラップさせたりと，教師によって自由に広げることが可能なのが小学校の特徴だと思います。

中学校は基本的に教科書を終えないといけないので，その中で活動を織り込んでいくというのが根本的に違うところだと思います。

竹内　教科の枠を飛び超えられる自由さ，そのあたりも小学校の英語の特徴ですね。

稲岡　そうだと思います。題材でいろいろな教科の内容を扱ってみようというとき，中学校ならその教科の先生に既習事項を尋ねなければなりませんが，小学校だと担任の先生が各教科の学習内容も把握されているので，既習内容とタイアップしやすく，子どもたちも理解しやすいと思います。

竹内　授業スタイルの大きな違いが小学校と中学校の間に存在していることがわかりました。「総合的な学習の時間」で食文化を学習したあと，産地について英語で表現したり，「歴史」で学んだことを英語のクイズにしたりと，柔軟に考えられるのは小学校のよさですね。別の教科で学んだ内容を英語でも言ってみたりできるということです。一方，中学校では各教科の専科の先生が指導するので教科枠は超えにくいのですが，意識的・分析的に学ぶことができます。そういった面でも確かにアプローチは違うだろうと思われます。

小中連携の意義とポイント

竹内　これからの義務教育は，9年間を通して子どもたちをどう育てていくのか，という目標を考える必要があると言われています。6・3で分けるのは大人の論理であり，子どもは一人の人間として成長していくわけですから，義務教育の9年が経ったらどんな子どもに育つのかを考えることはとても重要であると思います。

これは全教科に関わることですが，英語においても中学校の新学習指導要領に小学校の外国語活動を踏まえることが明記されています。さらに，高等学校の新学習指導要領案にも中学校との接続について明記されています。つまり，小中に加え，高までもが連携する状況が目の前にあるわけです。

そういった状況から「小中連携は必要だ」という前提にたって，小中連携の意義や，どのように進めたらよいのか，といったことをお聞かせいただければと思います。

稲岡　中学校側からいうと，小学校で何を身につけてきているか，また，集団としてどう伸ばすことが課題なのかということを見極めることが大切です。中学校ではスキル面を伸ばす必要もあるので，小学校でどのような「素地」が身についたかを，授業中の活動を通して自分たちの目で判断し，どういう形で迫っていこうかと考える必要があります。

また，小学校で何がうまくいって，何がうまくいかなかったかを小学校の先生とお話しすることができれば心強いと思います。中学校の目標を達成するために，そのアドバイスをプラスとして取り込んでいくことが大切だと思います。

兼重　同じコンセプトを持って進めていくためには，お互いを知らなくてはいけないと思います。

例えば，小学校の最後のレッスンに中学校の先生が入るとか，卒業前の2月頃に中学校の先生とインタビューをし合うとか，同じ中学校区の他の小学校とのテレビ会議に中学校の先生も参加するとかいったことで，スキル面で何ができているのかを感じることができます。

小中それぞれの場所で最大限に働けるのは，それぞれの先生だと思うので，小中連携を効果的に行うためにも情報交換は不可欠だと思います。

竹内　連携をしっかりし，お互いを知り合うことが大切だということですね。

実際の指導で一番悩むのは，中学校入学時，つまり入門期の指導だと思います。小学校で何を学んできているのか，どれくらい定着しているのかと悩むところですが，例えば，文字や音声の指導は，どうしていけばよいでしょうか。

PROFILE

柏木賀津子

奈良市教育委員会指導主事。ハローイングリッシュ事業，奈良市小中一貫教育推進，小学校英語訪問研修などを通して，担任の先生のよさを活かす小学校英語活動に取り組んでいる。また，子どもの第二言語習得の認知学習についても研究を進めている。

畑田　『英語ノート』を見ていると，チャンツがたくさん扱われています。これを活用すれば，比較的抵抗なく音声から文法事項に入れると思います。また，曜日や月なども音声で慣れ親しんでいるので，それをうまく活用すれば，文字にも抵抗なく移行できるのではないかと思います。

文字に関していえば，小学校でも文字を書きたいという子どもの欲求はありますが，そこであまり文字指導をしすぎるのは望ましくないと思います。「ここから先は中学校でのお楽しみ！」と期待を高めることも小学校サイドとしては配慮すべきだと思います。

竹内　小学校で身につけたことをよく把握し，それをうまく中学校側につなぐ工夫が必要なことと，中学校での「楽しみ」まで，小学校側がとらないという配慮が必要とのご指摘をいただきました。奈良市ではどうでしょうか。

柏木　奈良市では，入門期について，まず次の４つの連携を考えています。

①学習習慣：外国語活動で身についた，ペアワーク，グループワーク，インタビュー，情報収集活動などの学習習慣を中１につなぐこと。

②指導法：「聞く」「話す」中心で学習してきたので，中学校でも聞くことから指導したり，スピーキング活動などの言語活動を連携させること。

③発音と綴り：小学校では，外来語と英語で音が違うということに気づかせ，中学校では発音と綴りの関係を理論的に教えること。

④言語・文化：「外国語活動」ということなので，英語は世界の言語の中の１つというとらえ方をし，そのグローバルな視点を受け継ぐこと。

特に④については，話題に興味を持たせることが大事です。推進室では，中学校の先生と小学校の先生で題材が似ているページを見合って，授業のデモンストレーションをしたりしています。

また，文法の指導についても，どういう場面でその文が使えるかを，人との関わりや体の動きと一緒に指導できるとよいと思います。

竹内　指導法を連携させるということは，評価法もある程度連携させていくことになると思いますが，そのあたりはどうお考えですか。

稲岡　小学校と中学校では，目標が違う分，評価の観点が違うと思います。小学校では体験を通して理解を深め，積極的に取り組むことが大切になっていくと思いますが，中学校ではさらに，いろいろな活動や方法で「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力についても評価していきます。

竹内　現在は，中学校ではペーパーテストが中心ですが，これは変わると思われますか。

稲岡　ペーパーテストによる評価は，引き続き行われると思いますが，適した評価をするため，テスト問題の改善や工夫が重要になってくると思います。小学校で培われた音声面での理解が中学校でどのように伸びたかをみる問題，「読むこと」による理解度をみる問題や，英語のルールや文化に関する「言語や文化についての知識・理解」をみる問題，また，自分の考えや気持ちなどを英文で表現する「書くこと」の評価ができる問題などを一層工夫する必要性が出てくると思います。また，小学校で「聞く」「話す」中心に学習してきたことが単に「書けたらいい」ではなく，それらを活用してどうコミュニケーションを進められるか，ということを評価できるテスト問題がますます求められると思います。コミュニケーションを意識した評価の仕方を考えていかなければいけないと思います。

竹内　「文が作れたらよい」で終わらせるのではなく，その先のコミュニケーションをどう評価するのかがポイントになりますね。

奈良市の方では評価についてはどうお考えでしょうか。

柏木　奈良市では今，小学校の評価規準を作成し，共通理解を図っています。評価の観点は，小学校でも使えそうな中学校のス

ピーキングの活動を参考に作成しています。

『小学校外国語活動　研修ガイドブック』には，どのようにがんばっていたか，また，子どもの変化を見ることが大事ということが書かれていましたが，どんな方法で評価するか，また，中学校にどう伝えていくかということを考えていかなければならないと思います。

竹内　実際にやってみるパフォーマンス・テストが重要になりますね。中学校でも導入の必要性が出るでしょう。もし中学校でそういった評価法を導入しなければ，コミュニケーションは重要でないというメッセージを送っているのと同じになりますので，このあたりも連動する必要がありますね。

兼重　連携を考えるならば，何ができて，何ができていないのかという評価はした方がいいと思うので，パフォーマンス・テストを設定して評価することは，小学校でも中学校でも求められると思います。

中学校の先生が小学校に入ってきてインタビューをするというのは，小中連携を考える上で，とても勉強になると思います。以前，子どもたちにインタビューテストをしたことがあるのですが，何ができて何ができないのか，また，場面によって何ができるのかがよくわかりました。それを文書で伝えていくのは難しいので，次年度の中1を担当するであろう先生が小学校にやってきて，グループに分かれてインタビューやパフォーマンス・テストで評価をすることで，文書では伝わらない情報交換が可能になるのではないかと思います。

かつて，中学校から小学校を見たとき，一見何をしているのかがわかりませんでした。しかし，それは評価方法やねらいも含め，向いているベクトルが小学校と中学校では違うからだと思います。そういった意味でも，知的活動のより発展的なもの，何かを分析的に考える楽しさというのは，中学校に残しておいてあげるというのは大切なことだと思います。

もう一点，社会的な観点から小中連携を考えると，情報発信が重要になると思います。これまで，入門期は少しずつステップアップするイメージだったと思いますが，小学校に外国語活動が入ることで，言語材料の提示の方法が変えられるかもしれません。しかし，教科書を最初からきちんとやらないと保護者が不安に感じることもあるので，そうさせないために，情報発信が必要かと思います。

竹内　指導法・評価に関して，いろいろなご意見をいただきました。測定・評価には，点数化して生徒の能力を測る psychometric と，どれだけ定着したのか，指導法はどうだったのかなど，教育的効果を測る edumetric の2通りがあります。小中連携においては，児童・生徒の能力だけを見るのではなく，定着度や指導法の改善にもつなげていかなければいけないので，教師の方にもベクトルが向いた edumetric をしていかなければならないのではないかと感じます。

いずれにせよ，指導も評価も9年一貫といっているのですから，行政や学校はその方針を社会に向けて説明し，実行していく必要がありますね。

柏木　日本の子どもたちが最初に英語に接する約500時間を小中が担うことになるわけですが，小中連携を考えるとき，そこだけを考えるのではなく，その子どもたちが20歳になったときにどういう役割を国際社会の中で果たしていくのかを考え，そことぶれないベクトルを小・中学校では持ちたいと考えています。

そういう意味では，高校の英語教育もひと続きではないかと思います。小学校で最高のスタートを切ったとしても，それを中高とつなげていくためには，行政はもちろん，指導者も一本化しないと実現は難しいと思います。

竹内　やはりもっと大きなスパンで英語教育を見ないといけないということですね。

柏木　しかし，それをどうやって保護者に伝えるか，どうやって小学校と中学校の先生で共有するか。今あるものをつなぐのは連携ですが，今あるものを練って新しいものを作るのは一貫で，これは

PROFILE

兼重　昇

鳴門教育大学准教授，小学校英語教育センター兼務。同センター事業により「お遍路型研修」を全国で実施。『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』（文部科学省）の作成協力者。著書に『小学校 新学習指導要領の展開　外国語活動編』（明治図書出版）ほか。

大変です。一教員，一小中学校ではできないので，もっと大きな機関が，日本として何を目指すかということを打ち出さないといけないと思います。小学校の先生はいいポイントをつかんでいらっしゃいますが，それを説明する責任を小学校だけに任せるべきではないと思っています。

竹内　言語政策ですね。日本の弱いところです。学習指導要領を通して方針を示してはいるけれど，現場がそれをなかなか読み取れず，混乱が生じている側面もあります。一定の方向を，皆がわかるよう明確に打ち出し，ぶれずに，それをしっかりと発展させていかねばいけませんね。

中学校の指導は変わるか

竹内　では，小学校に外国語活動が入ったことにより，中学校の英語教育はどうなるとお考えでしょうか。

畑田　生徒が小学校ですでに学んできたことは何かということを日々の指導で意識し，もう一度丁寧に押さえるべきことと，さらりと進められることを区別し，メリハリをつけた指導ができるようになると思います。

また，小学校では「聞く」「話す」といった活動中心で展開するので，そういった態度は育ちつつあることを前提に，それを活かした授業を構築していくことができると思います。

2002 年に「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想が策定されましたが，どの程度の英語力を目標にするのかといった問題は，言語政策レベルの極めて難しい話です。今言えるのは，少なくとも自分が中学校で教鞭をとっていた時代のままではいけないということです。中学校も高校も，変わる，変わらないではなく，変わっていかないといけないということを痛切に感じています。

稲岡　変えやすい状況にはなっていくと思います。私たちは，まだ小中連携の経験が浅いので不安もありますが，きっとこうしたらどうかということは見えてくると思います。例えば授業で，今までなら文型練習であくせくし，テストが近づけば焦ってどんどん教科書を進めていたとしても，小学校の外国語活動で一度は触れていることであれば，オーラルで文型をもう一度思い出させ，さらに関連表現の文を使って大いに表現力を伸ばしたりすることもできると思います。

例えば，小 6 の「夢を語る」場面で I want to be ... の表現を練習したとしましょう。中 1 の自己紹介では，今までなら名前や誕生日などの表現を教えて自己表現をさせていましたが，今後は小学校で学んだ表現も自由にふんだんに取り入れさせることができます。さらに，中 2 の教科書で不定詞が出てきたとき，to の使い方について，改めて理論的に文法的な説明をしてあげられます。あわせて，「小学校ではこう思っていたけど，今はこれになりたい」という表現をさせ，because ... で理由を述べさせたり，What do you think about my dream? と意見を求めさせたりすると，表現を深めたり意見の交流をしたりすることができます。中学校は友だちの手助けをしたい，人のために役に立ちたい，人から求められる人間になりたいという思いがいっそう芽生えてくる時期でもあります。状況しだいで，自分を見つめ，自分に自信をつけ，友だちと支え合うということがどんどんできるわけです。題材の扱い方しだいで，自分と対話をするチャンスにすることができます。

竹内　小学校で学んできたことをうまくリサイクルして拡張する一連の流れが必要だということですね。習ってきたことをしっかり押さえて，もう一歩踏みこんでみる，もう一言付け加えて活動を発展させる，といった指導が必要なのかもしれません。

兼重　今，稲岡先生がおっしゃった「表現を深める」というのがポイントかと思います。小学校ではことばと本当に言いたいこととのギャップが問題になりますが，中学校では理由も英語で言うことができ，表現を深められるのがよさであると思います。時間数も中学校では週 4 時間に増えるので，どう深めていくか，広げていくか，知的好奇心をどういうふうに刺激し，自分の言いたいことを表現していくか，などといったように，ことばと言いたいこととのギャップを埋めていくことが，生涯教育としての英語教育のあり方だと思います。

竹内　深めていく，発展させていくということが中学校英語の醍醐味なのですね。

これと関連して，例えば，子どもたちに自分が変化したことを意識させるため，小学校の英語学習記録を中学校にも引き継いでいけるポートフォリオのようなシステムがあるとよいですね。音声でも簡単に記録を残せる時代ですから。そういう継続的評価，一種のカルテのようなものが中学校の英語の先生に届けられるシステムを国として構築していかなければならないでしょう。EUには，どんな言語を，どういうふうに学んで，何ができるようになったかを記録する言語ポートフォリオがあります。そういった「一貫した指導」の手助けになるようなツールを確立していかなければなりませんね。

柏木　ポートフォリオとまではいきませんが，I learned ... と心に残ったことを授業の終わりに言う場面をためていくとおもしろいかもしれません。また，ビデオ観察で小学校と中学校を記録し，自分の成長を見るのもおもしろいと思います。

竹内　では，小学校の成果を引き継げなくなるので，中学校ではこれを絶対にやってほしくない，というようなことはありますか。

畑田　例えば，子どもたちは小学校でいろいろな単語に触れます。きっと知っていることは言いたがると思うのですが，中学校でそれを制限することはしないでほしいと思います。

竹内　うまく受けとめてあげないといけないということですね。

稲岡　それはある意味，教師の人間性・資質に関わる問題ですね。

加えて，小学校の外国語活動を否定するような発言，例えば「発音が違う」「そんなことを習ったの?」といった発言は，お互いに1つの目標に向かっているわけですから，マナーとしてやめた方がいいですね。

また，思い切り書くという体験なしに，最初から型にはめると，自由な発想がつぶされるので，おもしろみや楽しさがなくなっていきますし，自由な発言や発想がしにくくなると思います。授業や評価で小学校と一貫性を持たせることが必要です。

それから，いくつかの小学校から1つの中学校に入学してくる場合が多いのですが，「いろいろなところから子どもたちが集まってきて楽しい」と考えたいものです。「学校によって差がある」とマイナス的にとらえることはよくありません。子どもも保護者も不安になり，その地域ではいい教育がなされないと思います。

兼重　中学校は，正確さを求めたりしなくてはならない立場だと思いますが，小学校の否定をするのはよくないですね。特に発音のことはよく言われますが，子どもの発音を聞かずにそういうことを言われる場合もあります。その意味でも積極的に情報をとらえることが必要なのかなと思います。

竹内　では，これを中学校ではぜひやってほしい，ということはありますか。

柏木　子どもはわからない単語や知らない音声形式でも，うまく音と意味を結んでいることがあります。そういった小学校での学びを活かし，豊かなインプットの中で規則を確認していく指導があるといいと思います。また，小学校と同じ表現を繰り返すときも，「似ている」から自信を持って取り組め，違う方法で学べるから新鮮だと考えてもらえたらと思います。

稲岡　確かに，小学校での音声中心の学びが基礎的な力となって，書く力に影響を与えます。しかし，音声だと得意ではないし，おもしろみがわからないけれど，書くのは好きだし，書くことで上手に自分の考えを表すことができる生徒もいるので，中学校ではそういう生徒にも自信をつけさせるようにしたいですね。

兼重　どんどん表現してみようという小学校外国語活動のコミュニケーションのスタイルと，正確さを求める中学校英語のスタイルがありますが，バランスをうまくとらないと，子どもたちがしんどくなってしまうと思います。中学校の先生は子どもたちを見て，調整していかないといけない。キーワードは「メリハリ」だと思います。

PROFILE

畑田　文

大阪府箕面市立西小学校教諭。箕面市内中学校，教育委員会勤務を経て，2003年より現職。『小学校英語　学級担任のための活動アイディア集3・4年生用／5・6年生用』（三省堂），『小・中学校の英語遊びシリーズ』（明治図書，長瀬荘一編）等の執筆に参加。

竹内　小学校は音声中心だから，中学校ではがんばって書かせないといけないと考える先生も出てくるかもしれませんね。そこをバランスよく，メリハリを大切に，というのはよくわかります。

小中連携の課題

竹内　次に，小中連携の課題をお聞きしたいと思います。おそらく，連携をしていく上で克服しなければいけない問題は山積していると思います。一番よく言われる問題は小学校と小学校の格差，つまり「小小格差」ですが，どうやって足並みをそろえていったらよいのか頭が痛いところです。また，早い時期からの「英語嫌い」出現も，克服しなければいけない課題です。

柏木　「小小格差」の問題を抱えるのは英語だけではありません。奈良市では，教員研修を行うときに中学校の学区別で小学校の先生に集まってもらい，時間数や内容などの情報交換をしてもらっています。将来的には，そこに中学校の先生にも参加してもらえるとよいと思っています。

また，『英語ノート』を見ているとインプットから発信活動へという流れになっていますが，インプットが十分でないのに発信をがんばってしまうと，アウトプットを急がせることになります。小学校の先生はプロジェクトが得意ですし，子どもたちに発表させるのはよいのですが，英語嫌いをつくらないためにも，無理そうだったら違う選択肢を持っておく，などといったことを，継続して研修していきたいと思います。

畑田　教員研修をしっかりする必要はありますね。高学年ほどきちんと理解しない段階で不用意に言葉を発したくないという気持ちが強いので，アウトプットを急がせ過ぎないことをしっかりと伝えていかないといけません。子どもたちがコミュニケーションを楽しみ，自発的に発話できるよう育てるのが理想です。

兼重　教員研修については，中学校の先生も参加しやすい環境を整えることが必要だと思います。お互いの状況を知るために，お互いの授業を見るというのは大切です。『英語ノート』をどう使うかということも研修などでは話題になると思いますが，与えられた指導案でそのまま指導するのではなく，その学校の実態に合ったやり方に変える工夫をすると，子どもたちに合った指導ができると思います。

竹内　小中の独自性もありますが，共通する部分については共通の研修が必要になってくるでしょうね。

また，モデルを提供されると，その真似をすることに終始して，自分の目の前の子どもたちに合った授業をしない先生も出てきてしまうので，自分で考える力をつける研修も必要だというご指摘をいただきました。

ちなみに，英語嫌いで入学してきた子どもたちがいたら，稲岡先生はどうされますか。

稲岡　まず，どんな子どもかという生徒理解に努めますね。何が好きなのかを探り，その子が興味を持つような題材やトピックをつかみ，それを授業で共有する場面を作って自信をつけさせていくと思います。

また，小学校と同じ活動をする場合でも，場面設定や相手を替えるなど，学習形態を変えることで，マンネリ化は避けられます。これは，授業のやり方，教師の力量・工夫にも通じることですね。

竹内　これからは，中学校でも学び合いを意識した授業の展開が鍵になりそうですね。

次に，中学校の教科書は，どう変わるべきだと思われますか。

柏木　子どもたちが聞いてきているだろう思われるTeacher Talkなどの表現を教科書で引き継いでもらえたらと思います。また，英語そのもののリズムがあるもの，原作のよさが息づいているものを入れてほしいと思います。それから，他教科で行っている学習活動も参考にし合えたらと思います。

竹内　確かにグループワークなどが上手にできている学校は，全教

PROFILE

竹内　理

関西大学（外国語教育学研究科・外国語教育研究機構）教授。専門分野は，英語教育学（学習方略，学習者要因）と教育メディア学。2004年度大学英語教育学会学術賞受賞。著書に『より良い外国語学習法を求めて』（松柏社），『「達人」の英語学習法』（草思社）ほか。

科でそういった学習活動を取り入れていますね。どんな活動を求められているのかが，生徒にもわかりやすいのでしょう。

畑田　指導している立場としては，『英語ノート』で学んだチャンツなどがマニュアルに入っているとありがたいです。子どもたちに思い出させる工夫があれば，小学校での学びが活かせます。

また，月，季節，天気など，小学校でも触れている単語は，もっと早くに扱ってもよいと思います。

兼重　テキストは出版社の色が出るのでおもしろいですね。量が少ないと，その分授業にオリジナリティを出す先生もいらっしゃいますが，出さないでそのまま使う先生もいらっしゃいます。マニュアルでどう示すか，発展的な活動をどう入れるか，外国語活動を活かすために最初の部分をどう工夫するか，またコンテンツをいかにふくらませるか，ということがポイントとなると思います。

また，平成 24 年度の新学習指導要領開始時の中学生には，小 6 でしか外国語活動を体験していない子どもたちもいる可能性があります。プレテキストをどうするかということも期待しています。

稲岡　自分の生徒に合わせて工夫ができる教科書だといいですね。また，友だちの発表を聞いて，英語で感想などを書いてみようとか，まとまりのある文章を書いて読んだ人とやりとりしようなどと，活動に目的を持たせることで，活動自体が変わっていくと思います。

竹内　発表で終わりではなく，それを通して何かをしようということですね。

稲岡　はい。インタビューや発表をして終わりにするのではなく，誰かに聞かせるための発表をするんだということを，生徒たちに理解させたいと思います。中学生は生活の中で，苦しんだり悩んだりしています。人の意見も聞いてみたいし，求めています。自分の考えがおかしいのでは，と不安になったりもしています。大変ではありますが，教師も文型のチェックで終わらせるだけでなく，そういう生徒に応えていく必要があるでしょう。

本文トピックは，生徒たちが興味を持つようなもの，心を打たれるもの，乾いた心に水を与えるようなもの，また斬新なものもあるとよいと思います。

竹内　中学校の英語教育は，Language Teaching というより Language Education なのでしょうね。一人ひとりの子どもたちに向き合う可能性を残した教科書を作らないといけないですね。

それでは，最後に一言ずつお願いします。

柏木　デジタル教材も充実してきましたが，生きたコミュニケーション活動は先生にしかできません。教員養成や研修などで，これからの英語教育を担っていく人材を育てていくことが重要だと思います。

また，「連携しよう」と意気込むと大変ですが，何か共通の目標に向かっているうちに小中連携ができるのがいい形なのではないかと思います。

畑田　中学校の先生方に，小学校の外国語活動にも興味を持ってもらえるようにもっと発信していかなければならないし，また，中学校では小学校で得たものを活かして連携し，発展させることができるように工夫していかなければならないと思います。

稲岡　小中が 9 年間の目標をお互いに確認し合うためには，生徒を軸に学区単位で連携していかないといけないと思います。また，指導法の連携の面で，教科書や『英語ノート』の影響は大きくなると思うので，それを使う教師側もしっかりと考えていかなければいけないと思います。入門期をどう扱っていこうかなどといったことも，同僚と確認し合い，小学校にも発信していきたいと思います。

兼重　今は大きな変革の時期だと思うので，教員養成や研修の機会に，新しい情報，具体的な情報をたくさん提供し，先生方にもこれまでの経験をうまく活用・共有していただくことが，より効果的な英語教育に必要になると思います。

竹内　先生方は，一人ひとりがプロフェッショナルです。プロは新しいものにすぐにとびついたりせず，情報をしっかりと手に入れ，考えます。しかし，いったん腑に落ちたら，果敢に行動を起こすものです。今日の座談会のお話を通して，いろいろな情報を集めていかなければならないことを認識していただき，あとはプロの感覚を総動員してよく考えたのち，機敏に動いていただければ，きっと小中連携はうまくいくだろうと信じております。

今日はどうもありがとうございました。（2009 年 1 月）